

爆弾が落ちたとされる場所

多くの方々に
船佐空襲のことを
知ってもらいたい——



つきじ しょうじ
築地 昭二さん (79歳・高宮町)

戦時により、親を失う子
がいます。戦争は、私
たち市民の生活をめちゃくちゃ
にします。

両岸に3発ずつ、計6発がほぼ
2〜300mの間隔で投下され
ました。爆弾投下の要因は、近
くにあった水路(堰堤)が発電
所を狙ったという説や、飛来し
たB29は写真偵察または気象偵
察が目的で、その帰りに爆弾を
落として帰ったという説、5月
5日同日にあった呉市の広にあ
る軍隊直属軍需工場への空襲に
行った一機が単機で行動したと
いう説があります。

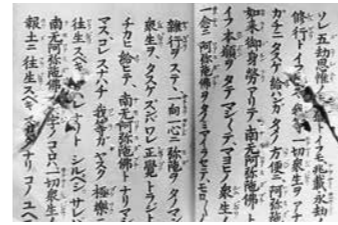
アメリカ軍機による県内の空
襲は、広島原爆までに45回あ
りました。爆撃は、広島・呉・
福山に集中しており、中国山地
では船佐が唯一の被災地となり
ました。

「船佐空襲のことは、『高宮町史』
や警察が残した戦災の記録など
にしか掲載されておらず、文献
はあまり残されていません。そ
のため、当時空襲を間近に見た
中森松夫さんや、旧船佐東国
民学校に通っていた方々に話を
聞いたりして、当時の状況を調
べています。高宮が空襲に遭い、
この地で7名もの命が亡くなっ
たということは、地元に住む私
たちは知っておかなければなら
ないことであり、後世に伝えて
いかなければなりません」

戦時により親を失う子がいる
(尚一さんの息子 中森五郎さんから)
当時の私は海軍に所属してい
ました。5月に、東シナ海方面
から佐賀県の唐津基地に戻った
時、いつもきていた便りが1つ
もなかった。おじさんに家
族に何かあったのかと便りを出
したら、みんな爆撃で亡くなっ
てしまった、と知らされました。
そのときは、すぐ家に帰ること
は叶わず、終戦まで家に帰りま
せんでした。広島に帰ってみる
と一面焼野原でしたが、芸備線
に乗ってみると、日常の風景が
広がっていました。ひよっとし
たら、家族みんな元気でいるの
ではないかと思いましたが、
帰ると、家族が亡くなった現実
を聞かされました。一時は死を
覚悟しましたが、自分が立ち直
らなかつたらいけないんだ、と
思って、こつこつと、何もなかつ
た状態から頑張ってきました。
外国の戦争をテレビで見たた
びに、戦争により、親を失う子
がいます。戦争は、私
たち市民の生活をめちゃくちゃ
にします。



空襲の事実を記す看板の前で説明をする
中森さん(左)と築地さん(右)



(上から) 爆撃でページが破れた『御文章』と爆弾の破片



米軍爆撃機「B29」
所蔵：米国立公文書館 提供：工藤 洋三

山間の地域に
落とされた6発の爆弾

1945(昭和20)年、5月
5日朝5時40分。米軍爆撃機「B
29」1機が飛来し、落とされた6
発の爆弾のうちの1つが中森
尚一さん宅前庭を直撃。母屋・
納屋を焼失し、当日たまたま里
帰りをしていた長女と孫娘を含
む家族7名がその犠牲となりま
した。

「当時は、『飛行機が飛ぶブーン
という音が聞こえたら手で耳を
ふさいで腹を地につけなさい』
と習っていたから、B29が飛来
してきたときはそうしてしまし
た。おじさん(中森尚一さん)
が『飛行機が通りよるで、きよ
るで』と言っていたのを覚えて
います。そして、ガラガラとい
う大きな音の後に、ドカーンと
いう猛烈な音がして、見てみる
と、家は跡形もなく、周囲は火
の海でした。そして、おじさん
やおばさんが、家の周囲に倒れ
ていました。みんな、ほぼ即死
でした」



なかもり まつお
中森 松夫さん (83歳・高宮町)

家は跡形もなく、
周囲は火の海でした——

知られざる 船佐空襲
—犠牲になった 7名の尊い命—

1945(昭和20)年5月5日。終戦の年。山あいの地域に、米軍爆撃機「B29」から、6発の爆弾が落とされ、その1つが民家に直撃し、7名もの尊い命が失われました。